C-7

宮古語の動詞形態論における拡張語幹：あるべきか、あらざるべきか[1]

林　由華（国立国語研究所／日本学術振興会）
ケナン・セリック（国立国語研究所）

1. はじめに

日琉諸語（日本語および琉球諸語）のように、活用クラスが認められ、各活用形において語根を除いた部分がクラス間で完全に一致しているわけではない場合、動詞形態論をどのように分析するかは、大きな問題の一つとなる。この問題に対しては、大まかにいって二つの分析方法がある。一つ目は、クラスごとの違いを屈折接辞側に表現する方法で、各動詞の語根に直接屈折接辞が付くとし、接辞側に様々な異形態を設ける分析（「語根―接辞」分析）である。もう一つは、クラスごとの違いを動詞側にいくつかの語幹（語根＋α）を設けることで表現する方法で、各活用形を特徴づける屈折接辞の異形態をできるだけ少なくし、その接辞が特定の語幹を選択するという分析（「（拡張）語幹―接辞」分析）である。この場合、動詞の語根に付いて拡張語幹（Thematic Stem）を形成する拡張分節（または拡張辞）を想定する必要があり、それはしばしば意味を持たずに語幹の一要素となる "empty morph" として分析される（Hockett 1947）。

南琉球宮古語[2]においても、共通する接尾辞に前接する分節が活用形ごとに変化する動詞（強変化動詞）の場合に、その分節が接辞の一部として動詞の語根に直接に付くという分析 (i) と、変化する分節は拡張語幹の一部とし、屈折接辞が複数の語幹の中から適切なものに付くという分析 (ii) と、どちらの分析を採用するべきかという問題が生じる。宮古語の個別の方言の動詞形態論を詳細に扱った先行研究では主に (ii) の拡張語幹の分析を採用している（大神：Pellard 2009、池間：林 2013、伊良部長浜：下地 2018、下地皆愛：セリック 2018）が、その根拠は必ずしも明らかにされていない[3]。

確かに宮古語諸方言においては、拡張語幹分析のほうがすっきりした記述になるように見えるが、各方言の個別の共時的データだけからでは必ずしもどちらがいいかはっきり決められるとはいえない場合がある。本発表では、そのことにふれたうえで、多良間方言および池間方言に起こった動詞形態論における歴史的な変化に着目し、そこで拡張語幹単位での交替とみなせる現象が起こっていることを示す。そして、そのような変化が複数方言において起こるということは、動詞形態論内の要素の結束性の強さにおいて、(i) の「語根―接辞」という区切りよりも、(ii) の「語幹―接辞」という区切りが強い、つまり拡張語幹の結束性が強いことを示しており、宮古語においては拡張語幹を想定するのが妥当と考える動機となることを示す。

2. 各方言における共時的分析：多良間方言の例を中心に

宮古語諸方言の動詞は、大まかに言って、クラス 1 動詞（四段動詞に対応）とクラス 2 動詞（二段動詞に対応）に分けることができる。それに加えて「来る」と「する」などに対応している動詞

---

[1] 本発表は、JSPS 特別研究員奨励費（課題番号 17J10117）（第一発表者）および国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー：木部暢子）（第二発表者）の助成による調査によって得られたデータに基づいている。

[2] 南琉球宮古語は琉球諸語のひとつであり、沖縄県宮古島市および多良間村で話されている諸方言群である。

[3] 下地 (2018) においては、拡張語幹説を採用する理由（「語根―接辞」説をとらない理由）が述べられているが、それは下地 (2018) における他の現象も含めた記述の枠組み内での問題点を指摘するものであり、通方言的に現象観察レベルでいえるものではないため、ここでは割愛する。

が不規則的な活用を示している。さらに、クラス 1 動詞の中に、動詞の語根末の分節によっていくつかの下位クラスが認められる。ここでは、多良間仲筋方言を具体例としてとりあげ、各方言にある程度共通する動詞形態論の問題点について述べる。

次の表 1 は、多良間仲筋方言の動詞パラダイムの一部である。

表 1 多良間仲筋方言の動詞パラダイム（一部）

	クラス 1			クラス 2	不規則
	書く	休む	飲む	出る	する
基本	kakɿ	jukuu	num	ndiɭ	sɿɿ
命令 1	kaki	jukui	numi	ndiru	ɕiru
勧誘	kaka	jukaa	numa	ndi	ɕuu
否定	kakan	jukaan	numan	ndin	ɕun
否定過去	kakadatam	jukaadatam	numadatam	ndidatam	ɕudatam
意志否定	kakaman	jukaaman	numaman	ndiman	ɕuuman
確定条件	kakaba	jukaaba	numaba	ndiba	ɕuba
意志	kakadzɿɿ	jukaadzɿɿ	numadzɿɿ	ndidzɿɿ	ɕuudzɿɿ
命令 2	kakada	jukaada	numada	ndida	ɕuda
過去	kakɿtaɭ	jukuutaɭ	numtaɭ	nditaɭ	sɿtaɭ
確定条件・理由	kakɿba	jukuuba	numba	ndiɭba	sɿba
条件	kakɿtaka(ra)a	jukuutaka(ra)a	numtaka(ra)a	nditaka(ra)a	sɿtaka(ra)a
未来	kakɿgumata	jukuugumata	numgumata	ndigumata	sɿ(ɿ)gumata
接続形	kakii	jukee	numii	ndii	ɕii
継起形	kakittii	jukeettii	numittii	ndittii	ɕi(i)ttii
完了形	kakitta	jukeetta	numitta	nditta	ɕi(i)tta

※ () にある分節は任意。

以下、表 1 で示されている動詞パラダイムをどのように分析するべきかを考える。ここでは話を単純にするために、規則動詞であるクラス 1 とクラス 2 の動詞に関してのみ言及し、不規則動詞は参考までに表 1 に含めるのみとする。

まず、クラス 1 に関して、基本、命令 1 と勧誘の形式を比較することで、それぞれの動詞の語根を確定することができる。すなわち、kakɿ : kaki : kaka, jukuu : jukui : jukaa, num : numi : numa の形式においては、kak-, juku-, num- という語根と、{-ɿ, u - ϕ }（基本）、-i（命令）、-a（勧誘）という形態素が得られる。同様のやり方で、クラス 2 においては、ndi という語根と、-ɭ, -ru , - ϕ の形態素が得られる。このようにして、それぞれの語根が確定される。

ここで、表 1 の二重線以下の活用形についてどのように分析するべきかが問題となる。クラス 1 と 2 はほぼ共通する接尾辞を持っているが、クラス 2 ではそれが直接語根に接続しているのに対し、クラス 1 では語根と全クラス共通の接尾辞の間に母音が介在し、それが活用形によっては下位クラスごとに異なる音形をとる。まず、語根―接辞に分解してみるとすると、表 2A のような結果が得られる。

表 2A 「語根―接辞」の分析による形態素の設定

	クラス 1			クラス 2
	kak-タイプ	juku-タイプ	num-タイプ	ndi-タイプ
基本	-ɲ	-u	-ϕ	-ɭ
命令 1	-i	-i	-i	-ru
勧誘	-a	-a	-a	-ϕ
否定	-an	-an	-an	-n
否定過去	-ada-tam	-ada-tam	-ada-tam	-da-tam
意志否定	-aman	-aman	-aman	-man
確定条件 2	-aba	-aba	-aba	-ba
意志	-adzŋŋ	-adzŋŋ	-adzŋŋ	-dzŋŋ
命令 2	-ada	-ada	-ada	-da
過去	-ɲtaɭ	-utaɭ	-taɭ	-taɭ
確定条件 1	-ɲba	-uba	-ba	-ɭba
条件	-ɲtaka(ra)a	-utaka(ra)a	-taka(ra)a	-taka(ra)a
未来	-ɲgumata	-ugumata	-gumata	-gumata
接続	-ii	-i	-ii	-i
継起	-ittii	-ittii	-ittii	-ttii
完了	-itta	-itta	-itta	-tta

表 2B 「語幹―接辞」

クラス 1/クラス 2
-ɲ, -u, -ϕ / -ɭ
-i/ -ru
-a/ -ϕ
-n
-da-tam
-man
-ba
-dzŋŋ
-da
-taɭ
-ba
-taka(ra)a
-gumata
(-ϕ /)-i
-ttii
-tta

表 2A のような「語根―接辞」による分解を動詞形態論分析として適用すると、太線で囲った基本、過去、確定条件 1、条件、未来 の各活用形について、(1) のような異形態のセットを想定する必要がある。

(1) 「語根―接辞」の分析による形態素の設定

a) 基本： {-ɲ, -u, -ϕ, -ɭ }

b) 過去： {-ɲtaɭ, -utaɭ, -taɭ }

c) 確定条件 1： {-ɲba, -uba, -ba, -ɭba}

d) 条件： {-ɲtaka(ra)a, -utaka(ra)a, -taka(ra)a }

e) 未来： {-ɲgumata, -ugumata, -gumata }

(1) に提示したもののうちどの接辞がつくのかについては、活用下位クラス（表 2A で「タイプ」と表示）まで指定する必要がある。しかし、一見して明らかなように、(1b)~(1e) の母音の異なりは、すべて基本形の末分節の異なりを引き継いだものである。つまり、分析として拡張語幹を認め、この末分節を「語幹」の一部とした基本語幹を想定すると、クラス 2 内では太線部分も含めすべての動詞で共通の屈折接辞を取り出すことができることになる。juku-タイプを例に過去形、条件形、否定形、意志形についての分析の違いを書くと、(2) (3) のようになる。

(2) 「語根―接辞」の分析：juku-u**taɭ**、juku-u**taka(ra)a**、juku-a**n**、juku-a**dzŋŋ**[4]

(3) 「拡張語幹―接辞」の分析：[juku-u]$_{\text{basic stem}}$**-taɭ**、[juku-u]$_{\text{basic stem}}$**-taka(ra)a**、[juku-a]$_{\text{a-Stem}}$**-n**、[juku-a]$_{\text{a-Stem}}$**-dzŋŋ**

(3) の拡張語幹を認める分析においては、屈折接辞としては最大限すべての動詞に共通する部分を取り出し、動詞クラスごとの違いは語幹における違いとして扱うため、接辞の異形態の数は大幅に

[4] 多良間方言は、宮古語の多くの方言と同じように ua という母音の連続が許容されない。ua > aa という形態音韻的な規則が適用される。

減らすことができる（表 2B）。クラス 2 およびクラス 1 の基本形・命令形 1 ・勧誘形のみ語根＝語幹であり、クラス 1 の基本形・命令形 1 ・勧誘形はそれぞれ、基本語幹（ɿ 語幹、u 語幹、ɸ 語幹、ɭ 語幹）、i 語幹、a 語幹と同形となる。この分析では、クラス 1 とクラス 2 の表 2A 網掛け部分についても接辞異形態を想定する必要がなくなる。当然、下位クラスとしての kak-タイプ、juku-タイプ、num-タイプがとる拡張語幹母音の異なりや、それぞれの屈折接辞が 1 つの動詞のうちどの語幹をとるのかを記述する必要はあるが、多良間仲筋方言以外の宮古語諸方言の先行研究においては、この、接辞の異形態を少なくして共通性を持たせ、クラス 1 の下位クラスごとに複数の拡張語幹を設定する分析が主流である。

ただし、これらの観察のみからどちらの分析がより適切であるかについては、決めがたい側面もある[5]。平子 (2018) で指摘されているように、「拡張語幹―接辞」分析では、拡張語幹分節として無意味形態素を設定する必要が生じてしまうというのも、「語根―接辞」のほうが優れていると考える理由の一つになりえるだろう。しかし、宮古語には、「語根―接辞」の区切りよりも、「拡張語幹―接辞」の区切りのほうが強い、つまり拡張語幹がひとつのまとまりとして振る舞っていると考えられる現象がいくつか見られる。池間方言などでは共時的にある種の屈折接辞の接続先として複数の語幹が許容され、ゆれが見られる、つまり拡張語幹単位での交替が起こる場合があることも、その一つの証拠になるが（セリック・林 2017 を参照）、本発表では通時的変化から、その拡張語幹の結束性について見てみたい。次節では、多良間方言と池間西原方言における歴史的な形態論的変化に着目し、それを根拠に拡張語幹を想定するのが妥当であることを論じる。

3. 宮古語の動詞形態論における歴史的な変化：確定条件形の形式

宮古語の代表的な方言の確定条件形（兼理由形）（表 4）を比較してみると、その形式が *kakiba、*jukuiba、*numiba、*idiriba に遡ることが明らかである。つまり、多良間仲筋方言や池間西原方言に見られる形式は改新形であり、それらの方言においては (4) (5) に示されている変化が起こったことがわかる。ただし、表 4 からは多良間 kɿ, uu, m :: 与那覇・平良・皆愛・砂川 ki, ui, mi のような音韻対応が読み取れるように見えるが、多良間方言において *ki > kɿ, *ui > uu, *mi > m のような音変化（または形態音韻変化）が起こったわけではないため (6)、多良間方言における改新形は純粋な形態論的変化による結果であると考えるべきである。池間西原方言についても、同様の指摘ができ、この方言においてもこの確定条件形において純粋に形態論的な変化が起こったと考えられる。

表 4 宮古語の確定条件形

	書く	休む	飲む	出る	する
伊良部仲地[6]	kakʲaa < *kakiba	jukujaa < *jukuiba	numʲaa < *numiba	ukirʲaa < *ukiriba	aɛirʲaa, aɛɛaa
池間西原	kafuba, katsɿba	jukuuba	numba	idiiba	asɿba
平良	kakiba	jukuiba	numiba	idiriba, idiruba	ɛɛiba
与那覇	kakiba	jukuiba	numiba	idiriba	

[5] ここでは、拡張語幹を認める説において、分節音が同一の語幹、例えば juku-タイプにおける u 語幹 [juku-u] や a 語幹 [juku-a] がすべての活用形において同じものであるということを前提にしているが、例えばアクセントや歴史的出自の異なりを考慮すると、実は異なるものである可能性があることも、問題になりうる。

[6] 伊良部仲地のデータは、富浜 (2013) による。

下地皆愛	kakiba	jukuiba	numiba	idiruba	ɕɕiba, ɕiiruba
城辺砂川	kakiba	jukuiba	numiba	idiriba, idiruba	ɕɕiba
多良間仲筋	kakɿba	jukuuba	numba	ndiɭba	sɿba
再建形	*kakiba	*jukuiba	*numiba	*idiriba	*ɕɕiba

(4) 多良間方言：*kakiba > kakɿba、*jukuiba > jukuuba、*numiba > numba、*ndiriba > ndiɭba

(5) 池間方言： *kakiba > kafuba, katsɿba (< *kakɿba)、*jukuiba > jukuuba、*numiba > numba

(6) TR pu**ki** :: HR MN UR pu**ki**「埃」、TR k**ui** :: HR MN UR k**ui** 「声」、TR ka**mi** :: HR MN UR ka**mi**「亀」[7]

(4) (5) に示されている形態論的変化をどのように分析するべきかが問題である。ここで、「語根―接辞」という区切りを設定することと、「拡張語幹―接辞」という区切りを設定することと、どちらが妥当であるかを検討する。

まず、(4)を「語根―接辞」として分解・分析すると、次の (4') のようになる。

(4') *kak-iba > kak-ɿba、*juku-iba > juku-uba、*num-iba > num-ba

ここでは、接辞の変化を想定しなければならない。特に、クラス 1 動詞群（kak-, juk-, num-）の場合は、何故各動詞ごとに形式の分岐が起こっているのかを考えなければならない。ある接辞が *-iba から -ɿba、-uba、-uba の諸形式を持つようになったとするならば、一つの動詞に対して、同じ範疇を表わす複数の動詞形が形成されることが期待できる。つまり、*juku-iba から juku-uba になるという必然性はなく、juku-ɿba や juku-ba などという形式も予測されるのである（表 5 網掛け部）。

表 5 「語根―接辞」分析でありうる確定条件形の予測形

	kak-	**juku-**	**num-**
*-iba	*kakiba	*jukuiba	*numiba
-ɿba	kakɿba	jukuɿba	numɿba
-uba	kakuba	jukuuba	numuba
-ba	音素配列論的に不可能	jukuba	numba

□：実際の形式。　：予測されながら、実際に存在しない形式。

しかし、この予測とは異なり、接辞の形式の分岐はちょうど活用タイプに添う形で起こっているのである。具体的に言うと、表 6 のように、基本形、過去形、未来形、条件形において、-ɿ- という分節を持つ動詞の場合には、*-iba が -ɿba となり、-u- を示す動詞の場合には、-iba が -uba になり、そして、母音を示さない動詞の場合には、-iba が -ba になっているのである。表 4 の全ての形式を「語根―接辞」のように分析すると、確定条件の形式に起こった変化を説明するためには、どうしても「確定条件の接辞は、その最初の分節を、動詞のパラダイム内における特定の接辞（過去、未来、条件）の最初の分節と揃える」という原理を導入することになる。それは結局、「拡張語幹を基に揃える」のときわめて近い分析になり、「語根―接辞（拡張語幹分節＋接辞）」よりも、「拡張語幹（語幹＋拡張語幹分節）―接辞」という区分・単位を基に変化が起こった、つまり拡張語幹を単位とした交替が起こったと考えるほうが妥当である。

[7] TR 多良間; HR 平良; MN 下地皆愛; UR 城辺砂川

表 6 「拡張語幹―接辞」で表現した確定条件形と他の動詞形との比較および各タイプの基本語幹

	書く	読む	飲む
確定条件	kakɿ-**ba**	jukuu-**ba**	num-**ba**
（再建形）	*kaki-ba	*jukui-ba	*numi-ba
過去	kakɿ-**taɭ**	jukuu-**taɭ**	num-**taɭ**
未来	kakɿ-**gumata**	jukuu-**gumata**	num-**gumata**
条件	kakɿ-**taka(ra)a**	jukuu-**taka(ra)a**	num-**taka(ra)a**
基本語幹	kakɿ	jukuu	num
i 語幹	kaki	jukui	numi
a 語幹	kaka	jukaa	numa

「拡張語幹―接辞」の分析を採用すると、(4) (5) の変化を極めて単純な形で説明できる。すなわち、「-ba の接辞が選択する語幹が交替した」と想定するだけで、全ての形式の変化を正しく記述できる。多良間方言においては、「確定条件形の -ba という接辞の付与先が元の i 語幹から基本語幹に変わった」という改新が起こったといえるのである。このことは、結束性の観点からいえば、「語根―接辞」でなく「拡張語幹―接辞」で区切るべきであるという強い動機となる。

池間方言についても、表 4 で提示したデータについて、これと同様の議論をすることができる。このように、2 つの別個の方言で拡張語幹を基本にした変化が独立した形で起こっているということも、その変化の実現を可能にしていた環境、つまり、拡張語幹という結束性のあるまとまりがこれらの方言が分岐する前の早い段階で宮古語において成立しており、それがこの 2 つの方言に引き継がれていることを示していると考えられる。

4. まとめ

本発表では、宮古語の動詞形態論において「語根―接辞」分析か「拡張語幹―接辞」分析のどちらをとるのが妥当かという問題を扱い、それが必ずしも各方言における共時的データからだけで決められるわけではないこと、通時変化からも語内の要素間の結束性の高さの違いを見ることができ、どちらの分析をとるのが妥当であるかの動機とすることができることを示した。2 節でも言及したように、本発表では扱っていないが、池間方言など一部の方言では、共時データのうちにも拡張語幹が単位となる交替現状、つまり拡張語幹の結束性の高さを示すものがある。現段階で確認できるデータからは、多くの先行研究が採用しているように、宮古語全体として「拡張語幹―接辞」分析をとるのが妥当であると考えられる。

【参照文献】

下地理則(2018)『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』くろしお／セリック・ケナン (2018) 「南琉球宮古語下地皆愛方言 ―簡略記述・談話資料・語彙集―」『言語記述論集』10:97-249／セリック・ケナン (2018) 「宮古語の動詞と形容詞 ―方言の分布と歴史的な変遷―」日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会 (平成 30 年 6 月 17 日)／セリック・ケナン、林由華（2017）「宮古語における終止連体形の定動詞性と動詞活用体系の歴史的発展の関係」日本言語学会第 154 回大会／林由華 (2013) 「南琉球宮古語池間方言の文法」京都大学大学院文学研究科博士論文／平子達也 (2018) 「総括にかえて」（口頭発表）「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」平成 30 年度 第 1 回研究発表会「動詞・形容詞（琉球諸語）」平成 30 年 6 月 21 日国立国研究所／Hockett, C. (1947) Problems of Morphemic analysis. Language. 23-4: 321-343.／Pellard, T. (2009) Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū. Linguistique. Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS).／富浜定吉 (2013)『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムス社